

北天院本堂を訪ねて

令和5年11月23日午後、まちづくり委員会による募集に応じた13名の面々は北天院の108段の階段を上り、本堂において住職の奥様のお出迎えを受けた。境内に足を踏み入れたことはあっても本堂に入った人は誰もいない。本堂は意外に広く、正面にはご本尊の釈迦牟尼佛が安置されており、天井には龍の絵が大きく描かれていた。

椅子に座って話を聞くことになり、全員で椅子を並べた後、愈々、奥様の話が始まった。現住職は第25世であり、奥様自身もお寺の生まれとのこと。以下、伺った話を要点的にまとめてみよう。

北天院は特別なお寺

- ・ 北天院は円覚寺を本山とし、本山直末10か寺の一つである。特筆すべきは、円覚寺派の中で、末寺でありながら本山の開山たる無学祖元を自らの開山としているお寺は北天院のみということ。北天院は誠に格が高いのである。実は、北天院は円覚寺の真北に位置しているが、そのことも大変重要な意味を持つのではないかと。
- ・ 北天院の格が高い理由は更に二つある。一つは足利直義によって建武元(1334)年に北天院のある品濃村が無学祖元の塔所である建長寺正統院の寺領とされたこと(正統院は翌年円覚寺に移された。)、今一つは弘安2(1279)年に29歳の北条時宗が元寇の両軍戦没者の菩提を弔うために請うて54歳の無学祖元を中国(宋)から迎え入れた際、無学祖元は鎌倉に入るに当たって、品濃村にあった一草庵で衣を替えたという口伝があることである。この一草庵こそが北天院の前身である。北天院の門前に「佛光国師草鞋ぬぎの古道場」の石碑があるのはこの故である。佛光国師は無学祖元のこと。
- ・ 鎌倉に招かれた無学祖元は先ず建長寺に入った。円覚寺が建築中であつたからである。新築された段階で円覚寺に移り、開山となった。無学祖元は一生日本に留まり、弘安9(1286)年10月3日に亡くなった。命日に当たっては、毎年、開山堂において、北天院の住職が前の晩から侍者として一人で詰めるのが習わしとのこと。このことから、北天院が特別の存在であることが分かる。

北天院と新見家との関係

- ・ 北天院と新見(しんみ)家との関係は、徳川家康に仕えた新見正勝が天正9(1581)年に品濃村に住むことになってから始まった。
- ・ 北天院では、正勝の50回忌、100回忌、150回忌、200回忌の法要が営まれたが、50回忌のときに徳川家康から米が寄進されたとの文書が北天院に残っている。正勝の位牌は本尊の後に安置されており、滅多に見せるものではないとのことであつたが、今回、特別に拝観を許された。薄暗い中に大変大きく立派な位牌があつた。また、その傍らには、正勝の息子の正盛から、遣米使節であつた正興の父・正路までの代々の位牌が大きな箱

に収められていた。北天院には、以前は廟もあったとのこと。なお、正路は大坂町奉行を経て第12代将軍徳川家慶の御側御用取次を務めた大変な能吏であり、かつ、学者であった。

- ・ このように北天院が新見家に対して大変丁寧な扱いをしているのは、新見家が北天院の「大檀那」であったからである。

天井の「龍」の絵の意味

- ・ 本堂の天井に龍の絵が描かれている理由について尋ねたところ、仏教において龍神は水を司る神様であり、寺院を火災から守ることを意味しているとのこと（確かに、禅寺では天井に龍をよく見かける。）。



茶菓の接待を受ける

- ・ 一通りの説明を受けた後、一行は本堂に隣接する机と椅子を並べた休憩室のような部屋に案内された。何と、そこで、茶菓の接待を受けたのである（下の写真参照）。「本日は順序が逆になりましたが」とお断りがあったが、禅寺では、態々拝観に訪れた方々に先ず茶菓の接待をするのが習わしとのこと。我々はその恩恵に与ったわけである。



除夜の鐘

- ・ 北天院では大晦日に除夜の鐘を鳴らしているとのこと。嬉しいことに、一般の参拝者にも鐘を鳴らしていただいていると聞き、一同、大晦日には是非再訪して除夜の鐘を鳴らしたいものだと言いつつ、お寺を辞した次第である。

(文責 まちづくり委員会 篠田伸夫)